

電気通信大学 平成16年度シラバス

授業科目名	有機物質工学第一		
英文授業科目名	Organic Chemistry I		
開講年度	2004年度	開講年次	3年次
開講学期	5学期	開講コース・課程	昼間コース
授業の方法		単位数	2
科目区分	専門科目-専門共通科目-必修科目		
開講学科・専攻	量子・物質工学科		
担当教官名	丹羽 治樹		
居室	東6-836		

公開E-Mail	授業関連Webページ
niwa@pc.uec.ac.jp	

【主題および達成目標】
<p>「有機化学」で有機構造論、有機反応理論（駒の動かし方）の基礎を学びんだ。 「有機物質工学第一」では引き続き、代表的化合物の有機反応理論と有機合成論を学び、有機化合物を作るのに必要な基礎知識を積み上げよう。簡単な化合物の合成経路が自分で考案できるようになる。あわせて生命現象を支える有機化合物についても簡単に言及する。</p>

【前もって履修しておくべき科目】
化学結合と構造、物質化学、物質とエネルギー、有機化学（必ず）

【前もって履修しておくことが望ましい科目】

【教科書等】
<p>教科書：マクマリー「有機化学概説 第4版」（伊東・児玉訳、東京化学同人） 参考書 1）井本 稔 「有機電子論解説 第4版」（東京化学同人） 2）ストラトウィーザー「有機化学概説（I、II） 第4版」（廣川書店） 3）ポルハルト・ショアー「現代有機化学（上、下）」第3版（化学同人） はいずれも生涯使える参考書である。2）3）はできれば英語版を薦める。理科系英語の良き文例集でもある。</p>

【授業内容とその進め方】

(a) 授業内容

授業は「有機化学」と同様に、マクマリー「有機化学概説第4版」に沿って進める。

6章． 立体化学

- ・鏡像異性体、対称性とキラリティー、キラル中心と立体配置のR / S表示、ジアステレオマー

7章． ハロゲン化アルキル

- ・合成、Grignard試薬、求核置換反応：SN1反応とSN2反応、脱離反応：E1反応とE2反応

8章． アルコール、エーテル、フェノール、チオール

- ・合成、酸性度、反応、ヒドロホウソ化

9章． アルデヒドとケトン：求核付加反応

- ・合成、反応、求核付加反応、Grignard反応、Wittig反応

10章． カルボン酸とその誘導体

- ・合成、酸性度、反応、求核アシル置換（付加・脱離反応）、酸塩化物、酸無水物、エステル、アミド、ニトリル

11章． カルボニル化合物の置換反応と縮合反応

- ・ケト-エノル互変異性、ケトン・アルデヒドの 水素の酸性度、エノールの反応：プロモ化、エノラートの反応：アルキル化、マロン酸合成、アセト酢酸合成、アルドール縮合反応、エステルの縮合反応

12章． アミン

- ・脂肪族アミン、芳香族アミン、塩基性度、合成、反応、N含有複素環

13章． 構造決定

- ・電磁スペクトル、赤外分光法と官能基検出、紫外分光法と官能基検出、核磁気共鳴分光法と構造決定

14章以降． 生体物質（有機物質工学第二でも学びます）

(b) 授業の進め方：

この分野は、自分で演習問題を解いて、はじめて深く理解することができる。そのため、講義以外に宿題を課す。

【成績評価方法及び評価基準(最低達成基準を含む)】

(a) 評価方法：

期末試験、出席点および宿題レポートで総合的に評価する。

試験にはA4 2枚（裏表使用可）までの直筆のレジメ持ち込み可（印刷物をコピーしたものや他人のレジメのコピーを持ち込んだ場合はカンニング行為をしたものとみなす）

成績評価	出席	5%
	宿題	15%
	期末試験	80%

(b) 評価基準：

電気通信大学 平成16年度シラバス

- 1) 基本的な反応(求核置換、求電子置換、求電子付加、脱離、求核付加)の反応機構(結合の生成と切断過程を電子対の動きで表現すること)が正しくかけること。
- 2) 立体化学の概念を理解していること。
- 3) キラリティーの概念を理解していること。
- 4) 簡単な有機化合物の合成経路が考案できること。

【オフィスアワー：授業相談】

いつでもけっこうですが、事前に必ずメールで連絡して下さい。

【学生へのメッセージ】

有機構造論、有機反応理論、有機合成論は有機化学の3本柱である。繰り返しになるが将棋に例えるならば有機反応理論、有機構造論は駒の動かし方に相当する。駒の動かし方が解れば、有機化学という将棋もおもしろくなる。解らなくなったら躊躇なく前に戻ろう。繰り返し学ぶことが理解の早道です。構造式や反応機構の理解には自分で手を動かして書いてみるのが理解の早道です。実際に書いてみると自分の理解のたりないところが解るようになります。

【その他】

有機化合物は無数の可能性があります。
これからの物性研究は有機化合物を避けては成り立ちません。
新しい扉は新しい鍵でないと開きません。形の決った新しい鍵は有機化合物しかあり得ないのです。